

母子の絆

朝倉郡三輪町 清武 正一

ビルマ作戦に於て、昭和20年3月、ビルマ中部の砂漠地帯でのメイクテラー作戦で不利な我が菊部隊は、軍の命令によりメイクテラー南東方のピョウベに転進して陣地を構築し、連合軍の攻撃に備えたのである。

私達の菊山砲5中隊は、残る野砲1門を持ってピョウベ駅附近に砲列陣地を構築した。4月10日、40度を超す暑い盛りの午前10時過ぎ、突如我が5中隊の観測所が敵戦車4、5台の攻撃を受け、アツというまに伊藤中隊長以下11名が壮烈な戦死を遂げた。

我が野砲は、中隊長の仇討ちとばかりに狂ったように発射した。砲列と観測所は約100mぐらいの近距離で百発百中、発射音と弾着音が同時に聞え敵戦車に命中、閃光と砲声、土煙りに包まれて物凄く、味方の陣地にも敵弾が「ダーン、ダーン」と落下破裂し、破片が「ブルン、ブルン」と唸り飛んで来て、私は唯夢見る心地がした。砲列におても砲手3名が壮烈な戦死を遂げたのである。

連絡係下士官の私に、内藤曹長がこの状況報告に大隊本部へ行けと言われた。私はとてもこの激しい弾丸の中を行けば必ずやられると思ったが、命令であれば仕方がない。鉄かぶとの紐をしっかりと締めなおし、覚悟を決めて飛出して走った。

運よく無事に大隊本部に到着し、篠田副官に報告し、帰る途中に敵戦車の攻撃で逃げて来る歩兵数十名に会い、一緒に後方に走った。その歩兵の中にメイミョウの病院で一緒に入院していた田中上等兵に会い一緒に突っ走った。

突如、近くに落下した砲弾の破片で田中上等兵は腹部をやられて倒れた。

見れば腸が露出して重傷である。こりゃとても駄目だと思ったが、「しっかりしろ」と励ました。田中上等兵は「もう俺は駄目だ」とうめくように小さく言った。自分の最後を意識したのか「オッカシヤン」と叫んだ。

死の一瞬母の顔が目に映じたのだろう。戦車はもうすぐ後に迫っている。どうしても助からないなら無情でも見捨てて行く外はない。10mぐらい走った時、後方で「ダーン」と爆発音が聞こえた。振り返って見ると田中上等兵は手榴弾で自らの命を断ち、あたり一面真紅の海と化していた。

私が重症のマラリヤと黄疸を併発し、メイミョウの病院に入院中、隣りの病床だった田中上等兵には大変お世話になっていたのに、何一つ恩返しも出来ず最後にはその骨すら拾ってやれず痛恨の極みであった。彼は母1人子1人で残された母の事を思うと、国のためとはいえ哀れでならない。

昭和18年7月25日、私達がビルマへ近い日に出動するというので、両親が弟達4人を連れて、夏の暑い盛りに久留米市西町の西部51部隊まで最後の別れに来てくれました。

農家の一番忙しい田の草取りの真最中に、疲れた体で子供の手を引き背に負い、我が子に会える喜びに遠い所を面会に来てくれた事に、涙の出る程嬉しくて面会所に飛んで行きました。

父は「お国のためだからしっかり頑張って来い」と一言、母は私の手を痛い程握りしめ「まあちゃん、人に負けんように御奉公せにゃならんばってん、この世には二度と来られんところじゃけ、命だけは粗末にしちゃいかん。弾丸に当って死ぬのなら仕方が無いが、決して無駄死だけはせんようにして、必ず帰って来にゃならんばい」と目に光るものがあった。私は「わかちよる、心配せんでええ」と答えるほか胸が一ぱいで何も言えなかった。

初年兵であまり長く面会する事は出来ない。母が早起きして作ったという私の好きな饅頭を貰って兵舎に帰るほかはなかった。ビルマの戦場に行けば、再び帰る保証はない。「そうだ、この親の愛に応えるには、運悪く弾丸に当って戦死すれば仕方がないが、決して病院で死んだり、自決等無駄死だけはしてはならない。命を大切に必ず帰るぞ」と固く心に誓ったのである。

それより数日後、私達同年兵約500人は勇躍ビルマに出征したのであった。ビルマ作戦では、フーコン、ミイトキーナ、メイクテラー、シタン作戦に参加した。同年兵が約2割しか生還しなかったのである。ビルマ作戦においては約19万人の戦没者だったというが、多くの戦没者が母や身内の名を呼んで逝った事であろう。

ビルマのバーモで菊師団司令部の野外図上作戦会議中、田中師団長、歩兵55連隊長山崎大佐、歩兵56連隊長長久大佐、辻参謀、三橋参謀めがけて、我が軍の第一線を突破して1人の中国兵が銃剣を振りかざして突撃して来たのである。辻、三橋参謀はとっさに本能的に身をかわしたが、ほかの3人は危機一髪で危いところを、そばで1人タコ壺を掘っていた当番兵の伊藤上等兵が、持っていたスコップで敵兵の銃剣を上から斜めに払いのけるはずみに、中国兵の脳天を真二つに割り即死させたのである。(中国兵は全員鉄かぶとはかぶってはいない)

見れば、17、8才の青年である。中国兵の服のポケットには母からの前線の息子宛ての手紙が入っていた。その手紙には「その後元気で軍務に励んでいることと思います。お前が兵隊にとられても母は淋しくありません。村の人達がよくしてくれます。畑を手伝ったり、慰めに来てくれますから決して後の事は心配しなくていい。卑怯な振舞いをしてはなりません。男らしく立派に戦って下さい」

中国の母も、日本の母も子を思う心は変りはありません。この母にしてこの子あり、立派な最後を飾ったこのあっぱれな中国兵の事を、辻参謀は手紙に書いて蒋介石総統宛に送るために、皮革の図のうに入れ、棒に結んで撤退したのである。

その手紙が蒋介石総統に届いたのである。どうして判ったかと言うと、作戦の神様と言われた辻参謀のことは、日華事変当時より蒋介石総統は既に知っていたという。敗戦後辻参謀は、金塊とマラリヤの予防薬のキニヒネーとを持って、タイ国の山中に逃げ、僧に化けてカンボジア、ラオスから中国に入り、重慶に辿り着いて、そこで蒋介石総統に助けられた。その時に手紙の一件を聞かされたのである。辻参謀はその後、蒋介石総統の特別の計らいで、兵隊の服装

で米軍のMPの目のかすめて日本に帰り着いたのである。

日蓮上人の遺訓に

親は十人の子を育つれど

子は一人の親も養いえず

日蓮上人の様な偉い方でも親不孝を嘆いておられます。凡人の私ですが今更親孝行をしておけばよかったと悔まれてなりません。親が子を思う気持ちは無限です。私が今日まで長生きできたのは、命の大切さ、命の尊厳を教えてくれた母のお蔭と感謝しています。

ほんとうに親は有難いものです。合掌。